

2022年度の「初等外国語科教育法」の課題について

英語教育講座・池野修

1. 授業の概要

「初等外国語科教育法」は、小学校免許取得にあたっての必修科目であり、教育実習直前の3年次前学期に受講する科目である。授業では、これまでの小学校英語、学習指導要領、「外国語」「外国語活動」の授業や単元の構成、学習指導案、評価のあり方、小中連携、児童や学校の多様性への対応などのトピックについて学び、授業実践動画を活用した授業分析や様々な英語活動の体験などを通して、授業構想力や授業省察力などを向上させることを目標としている。教員免許法の改定により、2021年度から必修になった科目であるが、2021年度はコロナ禍で遠隔による実施であったため、対面で開講したのは今年度が初めてである。受講生は154名であった。

2. 授業の評価

2.1. 授業評価方法

学期末に実施した授業アンケートにおいて、大きく「授業内容で有用であると思った点」と「授業の課題と授業への要望」の2点に関する質問に自由記述の形で回答してもらった。有用であると思った点についても多くの回答を得たが、本報告では、課題や要望に関する回答の中で授業者が気になったものを取り上げ、それらについて考察を行うこととする。主には、(i) 授業中に学生へ注意を行うこと、(ii) ペアの作り方、(iii) 出席方法の確認、(iv) 印刷資料の扱いについてである。

2.2. 授業中に学生へ注意を行うことについて

本授業では、多くの回において、小学校「外国語（活動）」の授業で行われる活動を受講生に体験してもらい、その体験に基づき活動の工夫や留意点などを考えるという流れを取った。この授業スタイルにおいては、受講生の活動への参加が授業の成否を決めるので、活動に参加しようとしていない学生には、教壇から（名前は分からなかったため）座席位置を特定する形で何度か厳しく注意を行った。

このことに対して、何名かの受講生が否定的な見解を述べている。

- 「何名かの学生を見せしめのようにして叱っていた。」

- 「言っていることは正しいような気がするが、少し威圧的に感じた。」
- 「他の人がみんなの前で長時間注意されているのを見ることには嫌悪感しかない。」

注意を行うにあたっては、人物ではなく行為を問題視する、長時間指導しない（最長で1分間は超えないようにしたつもり）などを心がけてはいたが、授業中に全員の前で注意を行うことを問題視する学生が何人もいたことが明らかになった。

このことに関連して、11月に行われた教育学部FD研修会（「学生指導のあり方」）において、講師の野本先生が、「最近の学生には「叱咤激励」と言う言葉は死語です。「叱咤」があると「激励」はなくなる。」と言われていたことも思い出される。

現在でも、問題である行為に対して、担当教員として何らかの注意を行うことは必要であると考えている。そのような指導を行わないことは、「その行為をしつづけても構いませんよ」というメッセージを送ってしまうことになるのではないだろうか。また、特に教育実習直前の学期にある教職の授業ということもあり、「実習モード」、つまり原則として教育実習で許可されないことは許可しない（もちろん服装や髪の色などはのぞく）という方針も間違っていないと思う。どのように注意を行うべきかが問題なのであり、威圧的にならないように、現在の学生に合わせた指導のあり方を考えていきたい。

2.3. ペアの作り方について

授業中の活動の多くはペアで行うものであったが、ペアは受講生が自分で考えて作るように指示した。ただし、毎回の授業前に、「できるだけ毎回違う人とペアを作って座ってください」というスライドを示すとともに、授業の中でも、「外国語（活動）」で大切にしていることの一つは、多様な人と関わる体験です。そのことを考えて、色々な人とペアを作るようにしてください、「多様な考えに触れることで学びが深まるので、毎回違う人と組んで活動を行ってください」と何度も強調した。

これらの指示にもかかわらず、毎回同じ人とペアを作って活動した受講生が多かったようである。このことは以下の感想にも表れている。

- 「同じ席に座りがちで、ペアワークが固定の人とすることが多かったです。もっと多くの人と活動がしたかったです。座席指定をしるとは言えませんが、改善して欲しいです。」
- 「結局同じ人とずっとペアだったので、座席指定するなど、教師側の工夫も必要だと思った。」
- 「[ペアの相手を変えれば] 有意義になるとはわかっているけど固定された人間関係をくずすのはなかなか難しい。」

学生に意義を説明した上で学生の判断に委ねるのではなく、これらの回答で言われているように、教員の方で受講生のペアを決めたり、座席指定をしたりするべきであろうか。なお、今年度も完全に自由にしたわけではなく、授業開始時点で、「現在、前後左右の隣に座っている人以外とペアを作ってください」という指示を行ったことも多い。

以前あった「初等外国語の指導法」という授業では、受講生が 50 名程度であったので、トランプのカードを引いてもらい、同じ数字の人が同じグループになるという形や、ワークシートに通し番号を書いてそれに従い着席するという形でグルーピングを行ったこともあるが、150 名を超える規模になると、毎回異なる座席指定をするのは簡単ではない。また、まず間違いなく欠席者がいるので、パートナーがいないペアの作り直しにも時間を要することも問題となる。現段階では有効な代替案を考えられている訳ではないので、大人数クラスを担当している他の教員からも情報収集を行い、対応を考えていきたい。

2.4. 出席確認の方法について

出席は毎回の授業後に Moodle 上に提出するミニ・レポート（テーマは授業の最後に提示）をもって確認した。出席カードを活用することも考えたが、提出されたカードの並べ替えやチェックに時間がかかりすぎること、いずれにしてもミニ・レポートは提出してもらうことなどを総合的に考え、この方法を採用した。

この方法の問題点を指摘した以下のような回答があった。

- 「出席しなくても課題ができたため、一度も休まずに行ったのに、ほとんど来ていない子と同じ評価になるのは不公正だと思う。」

この問題についても、残念ながら、有効な解決方法は見出せていない。いずれにしても、出席確認に時間と労力がかかり過ぎ、より重要な授業準備などに影響が出ないようにしたいと考えている。

2.5. 印刷資料の扱いについて

資料は、最初の 2 回をのぞいて基本的に Moodle

上で配布という形にした。ただし、授業の活動で用いる資料については、印刷したものを授業に持参したことも多い。これは、端末の調子等が原因で資料が見れなかったり、資料によってはスマホなどの画面では判読が難しかったり、端末で見る資料だとそれを持ち歩きながら活動を行うのが難しかったりして、うまく活動が成立しなくなってしまうことを懸念したためである。

このことについては、2 つの異なる要望があった。

- 「Moodle で印刷してくるプリントと当日配布するプリントを分ける意味があまり分からなかった。」
- 「資料はオンラインでのみ活用する。資料が多く、かさばってしまうため。」
- 「パワーポイントで使っている資料を全員に紙媒体で配布して欲しい。」

このように、紙の資料を配布することに対して様々な意見がある訳であるが、基本的に、今年度と同じように、Moodle で配布するデジタル資料と授業中に配布する紙資料を組み合わせたいと考えている。

2.6. その他

「外国語（活動）」での主な活動の 1 つは、ペアの相手を次々に変えながら行うインタビュー活動であり、本授業でも様々なインタビュー活動を行ったが（十分な距離をとって小声で活動するようにとの指示は何度も行っている）、これを問題視する回答があった。具体的には、「席を立っての活動はしない。どうしても不特定多数の人と接触することになるのはこのご時世怖い」というものである。学びの質の多少の低下につながっても、感染可能性の最小化を優先すべきという考え方であり、コロナ禍 3 年目ではあったが、考慮すべき考えであったかも知れない。

最後に、「挨拶しても無視された」というような回答が 2 件あった。学生にそのように感じさせたのは私の責任であり深く反省している。ただし、意図的に無視したことは一度もない。一因と考えられるのは、視力低下のため、距離があると他の人の顔（の表情）がよく見えないため、挨拶されていることに気づけなかったことである。この点については、昨年 6 月に目の手術を行なったので、視力は回復し、状況は改善はされている。当然ではあるが、挨拶してくれた学生にはきちんと挨拶を返すようにしたい。